

Support for Maladjusted Junior High School Students from the Perspective of Universal Design

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大井, 健都 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026895

学校に困り感を持つ中学校生徒への支援策の検討

—ユニバーサルデザインの視点から—

大井 健都

Support for Maladjusted Junior High School Students from the Perspective of Universal Design

Kento Oi

1 問題の所在と研究の目的

文部科学省（2012）の調査によると、通常学級における教育的支援を必要とする生徒の割合が 6.5% であるという結果が出ている。学習面や行動面で困難を抱えている児童生徒が増える中、それらの児童生徒に十分な支援が行き届いていないのが現状であり、教員が生徒一人ひとりに対して、個別支援だけでは支援が難しいとされている。そこで、困難を抱える生徒を含め、すべての生徒が学びの実感のある授業や学校生活を送ることができるような支援策を検討することがさらに求められている。その手立てとして、教室や授業にユニバーサルデザイン（以下、UD）の視点を取り入れることが有効であると考えられる。

静岡県総合教育センター（2017）によると、UD の考え方を生かした授業づくりについて中学校と高等学校では必要性は感じているものの、十分に関心が高まらなかったことが明らかにされている。また、国立特別支援教育総合研究所（2014）によると、中学校と高等学校では、教科担任制であることにより、支援のための体制づくりが困難であることが指摘されている。中学校、高等学校では、小学校に比べ、生徒の理解や支援体制づくりを行うために、より情報共有や連携が必要であると考えられる。

今回の研究では、学級にいる支援を必要とする生徒が見逃されることなく、学びの実感を得ることができるような支援策の在り方についてUD の視点を手立てとした実践を行い、考えていくことを研究の目的とする。また、中学校でUD化を実現していくためにどうしたらよいかについても同時に考えていく。

2 研究の方法

本研究ではA 中学校の通常学級（1年B組）と特別支援学級（C組）を対象とし、担当教員に協力してもらい、学級の中でUD環境を作り、学級の中で支援を必要とする複数の生徒の困り感に注目しながら、UDの視点を踏まえた支援策を学級全体に取り入れる。支援策を取り入れたことで、困り感を抱えた生徒に加え、すべての生徒の困り感や満足感等がどのように変容していくか検証していく。

3 支援計画

支援計画の流れについてまとめる。質問紙調査の結果をふまえ、管理職や学年主任との話し合いにより、対象学級（1年B組、特別支援学級C組）が決定した。その後、対象学級の教員、生徒への聞き取り調査を行いながら、支援員として授業に参加し、学級や生徒の様子を把握に努めた。また、夏休み明けにSDQによる生徒への質問紙調査を行い、対象学級の気になる生徒を決定した。対象の学級と生徒が決まり、学級担任や教科担任と支援策について検討し、支援策を行うこととした。研究を行う中で、担当教員と話し合い、PDCAサイクルを繰り返しながら、学級全体及び気になる生徒に焦点を当てた支援計画を進め、その後、質問紙調査や聞き取り調査の結果から変容を図り、分析するという流れで、研究を進めた。最後に、その支援策をふまえ、4件法による質問紙調査と聞き取り調査を教員、生徒対象にそれぞれ行い、支援策

をふまえて、学級や生徒の変容がどのように変わったのかについて分析、まとめを行った。また、継続的に「UD 新聞」を発行し、研究の概要や UD について A 中学校の教職員への発信も行った。

(1) 1年B組

支援策は、10月の実施に向けて、学級担任、教科担任と話し合った際のものである。それを基に、学級の状況をふまえ、支援策を行ったため、学級により内容が一部異なる。環境面、学習面とそれぞれの内容について述べていく（表1、表2）。

表1 1年B組で実践した支援策（環境面）

	目的	手立て
継続	<ul style="list-style-type: none"> ・話しやすい環境づくり ・集団として徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・コの字型の席 ・2分前着席
新規	<ul style="list-style-type: none"> ・集中して取り組める ・学校のルールが分かる 	<ul style="list-style-type: none"> ・整頓されたロッカー ・一日の生活と予定黒板をリンク

表2 1年B組で実践した支援策（学習面）

視点	目的	手立て
視覚化	どの子も情報が使える	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT、具体物 ・タイマーの活用
共有化	学び合い	<ul style="list-style-type: none"> ・ペア、グループの交流 ・ボードの活用
焦点化	どの子も内容をつかめる	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題の工夫（問いの工夫） ・UDチョークの活用、チョークの統一

学習面に関しては、UDの視点の中で「視覚化」、「共有化」、「焦点化」に関する支援策を取り入れることとした。教科担任同意の下、「UDチョーク」や「タイマー」の活用については統一して実践を行い、それ以外の手立てについては、教員の負担にならないように、部分的に取り入れてもらうようにした。

(2) 特別支援学級C組

今年度は特別支援学級C組に在籍する生徒が少ない上に、交流で通常学級に出ている生徒もいるため、常に複数の生徒がいるとは限らない状況である。そこで、特別支援学級C組では限られた状況の中で、できることに注目し、研究を行った。手立てとしては、1年B組と異なる点として、新たに「コミュニケーション活動」を取り入れている。

4 実践の結果

(1) 1年B組の変容

変容については、対象学級の気になる生徒、学級全体に注目し、UDの視点を取り入れる前後で、検証方法から以下にまとめる。

気になる生徒の変容については、様々（プラス、変わらない、マイナス）であるが、全体的にプラスに変容していることが質問紙調査の結果から明らかとなった。それぞれの困り感に寄り添った手立てを行ったことで、気になる生徒の支援につながったと考えられる。だが、その中で、支援ができなかった点については個別の支援を行うことが求められる。

学級全体については、学級担任と話し合い、学力や学習意欲等を基準に上位層、中位層、下位層の三つ

の層に注目しながら、変容をみた。質問紙調査は支援前（5月）と支援後（12月）に対象学級の1年B組と1年D組（支援策は取り入れていない）の2学級に行った（表3）。

表3 生徒を対象とした質問紙調査の平均値（標準偏差）と時期による変化

生徒質問紙調査結果						
質問項目	1年B組			1年D組		
	5月	12月	t検定	5月	12月	t検定
(1) 学校生活は楽しいですか？	3.62(0.56)	3.55(0.57)		3.50(0.63)	3.53(0.57)	
(2) コの字型の机の配置の授業は学びやすいですか？	3.58(0.57)	3.31(0.71)	*	3.36(0.67)	3.37(0.81)	
(3) 授業中の小集団活動で新たな考え、理解が深まったことがありますか？	3.65(0.55)	3.66(0.55)		3.46(0.68)	3.37(0.72)	
(4) 授業中は集中して取り組んでいると思いますか？	3.68(0.54)	3.38(0.62)	*	3.50(0.51)	3.33(0.61)	
(5) 黒板のチョークの色や文字の大きさは見やすいですか？	2.72(0.80)	2.59(0.78)		3.73(0.52)	3.53(0.77)	
(6) 宿題の取り組み方や宿題の提出方法、場所が決められていますか？	3.82(0.38)	3.76(0.44)		3.80(0.41)	3.73(0.45)	

* $p < .05$ † $p < .10$

5月と12月で比較してみると2学級とも全体的に平均値が下がっていることが理解できる。また、生徒への質問紙調査における有意差をみてみると1年B組では、問2「コの字型の机の配置の授業は学びやすいですか？」、問4「授業中は集中して取り組んでいると思いますか？」に関して、有意差がみられた。同様に、2学級を比較してみると問4で有意差がみられた。

問2に関しては、A中学校全体で取り入れているコの字型の席に対して、さらに集中して取り組みたいと思っている生徒もいることが明らかになった。問4について原因を検証するため、他の問いとの相関係数を出した（表4）。

表4 問4と他の項目の相関係数

1年B組 相関係数		1年D組 相関係数	
	問4		問4
問1	0.19	問1	0.07
問2	0.45	問2	0.09
問3	0.29	問3	0.34
問5	0.04	問5	0.05
問6	0.22	問6	0.34

1年B組では、問4に対して、問2、問3との相関が高いことが明らかとなり、集中して取り組むことができない原因として、「共有化」における手立てが関係していることが理解できる。また、階層でみると上位層における変化が大きく、上位層の生徒にとっては学びやすい反面、すぐに理解している課題についても一から話し合うことになり、その影響があるのではないかと考えられる。1年生は自己肯定感が下がりやすい時期（批判的思考）であり、他者に対する見方が変わるため、これが影響しているのではないかと考えられる。担当教員からみた生徒の様子についての聞き取り調査等の内容をまとめると、UDチョークに関しては見にくさを感じており、学び合いに関しては気になる生徒に加え、他の生徒が互いに問い合わせ、学び合うことで、特に女子生徒が発表や行動で前に出てくることや集中して取り組むことができたということが明らかになった。

(2) 特別支援学級C組の変容

実際に「コミュニケーション活動」については、それぞれの中学時代の生き方や将来の夢などについて

語り合い、学級全体の雰囲気としても5月の今まで会話の少なかった学級に比べ、会話が増え、積極的にコミュニケーションが行われる学級になったことが授業観察や教員への聞き取り調査からも明らかになった。だが、情緒学級の場合、それぞれの生徒の気持ちをコントロールすることが発言や行動に影響されやすい傾向がある。そのため、UDの視点と同時に個別支援をしながら生徒を支援していく必要がある。また、2人の担当教員は共通して、特別支援の専門ではないため、UDを行う前から、どのように支援をしていくのかについて悩んでいた。そこで、生徒と共に関わる中で、生徒のよさや困り感を把握し、言葉かけや「待つ」といった点を意識しながら、その状況に応じた対応を心掛けていた。それにより、支えることができたのではないかと推測する。

(3) 教員全体の変容

今回の研究では、特定の学級の中で行ったため、担当教員だけでなく、教員全体に研究内容や変容について理解してもらえるように「UD新聞」を発行した。主に質問紙調査の結果から検証を行う。

質問紙調査の結果を比較すると以下のようなになった(表5)。

表5 教員を対象とした質問紙調査における平均値(標準偏差)と時期による変化

質問項目	教員質問紙調査結果					
	重要度			実行・実現度		
	5月	12月	t検定	5月	12月	t検定
(1) 発達障害についての最新事情を理解すること	3.64(0.50)	3.74(0.45)		2.30(0.69)	2.50(0.60)	
(2) インクルーシブ教育システムについて理解すること	3.26(0.47)	3.35(0.71)		2.15(0.71)	2.18(0.66)	
(3) 授業や教室環境におけるユニバーサルデザインの支援をすること	3.50(0.50)	3.70(0.47)		2.81(0.68)	2.77(0.61)	
(4) 一人一人の困り感を把握すること	3.71(0.39)	3.96(0.21)		2.81(0.69)	3.00(0.69)	
(5) 学級の中に、生徒たちには居場所があり、認められているという安心感があること	3.86(0.29)	3.96(0.21)		3.19(0.50)	3.00(0.62)	
(6) 学級全体で「〇〇な学級にしよう」という意識を持たせること	3.71(0.45)	3.78(0.42)		3.04(0.49)	3.05(0.65)	
(7) 指示などは聴覚的(言語)だけでなく、視覚的(板書等)に提示すること	3.61(0.45)	3.87(0.34)	†	2.96(0.58)	3.18(0.66)	
(8) 授業の流れや内容が分かる板書を構成すること	3.57(0.66)	3.78(0.42)	†	2.74(0.63)	2.55(0.74)	
(9) 指示する内容をより分かりやすくするための教材・教具(具体物、写真、動画、ICT等)を使用すること	3.57(0.59)	3.87(0.34)	*	2.85(0.64)	2.86(0.64)	
(10) 授業のねらいに即して、活動を焦点化すること	3.64(0.49)	3.87(0.34)	†	2.79(0.59)	2.86(0.56)	
(11) 授業のねらいに即して、視覚化を図ること	3.57(0.49)	3.70(0.47)		2.86(0.68)	2.64(0.73)	†
(12) 授業のねらいに即して、ペア学習、グループ学習、一斉学習等、様々な学習形態を工夫すること	3.54(0.66)	3.78(0.52)		3.00(0.65)	3.18(0.66)	
(13) 気になる生徒のつまづきに対する支援を講ずること	3.57(0.51)	3.74(0.54)		2.78(0.72)	2.64(0.66)	
(14) 個別の支援計画を作成すること	3.21(0.82)	3.22(0.85)		2.37(0.76)	2.73(1.08)	*

* $p < .05$ † $p < .10$

質問紙調査の結果をまとめると、5月、12月も共通して重要度の割合に比べ、実行・実現度の方が低いことが明らかである。その中で、重要度に関しては、すべての質問項目において12月の方が重要度は高くなっている。重要度の問7、問8、問9と実行・実現度の問11は「視覚化」に関する内容であり、代表的な手立てとして、「UDチョーク」を取り入れたものの、変容がみられない中で、教員が生徒に分かりやすく、情報を提示するための意識に影響をもたらしたのではないかと考えられる。だが、問11の実行・

実現度は試験前より下がっていることから「UD チョーク」の影響もあると考えるが、視覚化を行うことで、どのような効果があるのかイメージすることが難しかったのではないかと推測する。

他には、問 14 は「個別の支援計画」に関する項目であるが、高いことから、生徒の困り感を把握し、どのように支援をしていくのか考える上で、個に向き合う意識が高まったことにより、集団の中において「個別の支援計画」を取り入れることにつながったのではないかと推測する。教職歴でみると比較的浅い教員の変化が大きく、「個別支援計画」に対する理解とその重要性を把握し、意識している教員が多くなったのではないかと考えられる。

中学校でUD環境を実現するためのヒントと難しさが聞き取り調査から分かり、重要度が高い中で、どのように実現させていくのが今後の課題であると考えた。また、これら以外にもUDは支援策としては有効な手立てであるという意見がある反面、UDに対する理解が教員により異なるという意見もあった。

5 UD新聞

「UD新聞」をA中学校の教員向けに発行した(図1)。主な内容としては、UDにおける先行研究や実践事例の紹介、UDに関する知識、研究内容の紹介、大学院の講義の内容等についてである。発行する目的として、UDにおける先行研究から中学校ではUDの実現が難しいと言われ、実際にA中学校で行った5月の質問紙調査の結果から特別支援教育やUDについて個人差があることが明らかになった。そこで、通信を通して共通理解を図る必要があると考えたからである。また、今回は学校全体ではなく、対象学級を絞り研究を行ったため、1年B組や特別支援学級C組を担当しない教員にも、研究の内容について情報共有し、研究やUDに対する理解を深めたいと考えたからである。



図1 「UD新聞」

実際にA中学校の教員間で、特別支援教育やUDに関する理解について個人差がある中で、定期的に発行することで、学校全体でUDについての基盤を共有することができたのではないかと受け止めている。また、教員からの意見で、「UDに対する理解が深まった。」や「UDチョークの結果には驚いた。」と言った意見があり、全体的に12月の質問紙調査の結果から特別支援教育やUDに対する重要度が高まったことにも関係しているのではないかと推測する。

6 総合考察

今回の研究では、単発的な介入による難しさもある中、支援として行うことには限界があった。その中で、教員全体の特別支援教育やUDに対する共通理解の基、UDにおける支援策の有効性を理解し、留意点を把握した上で、取り組むことにより支援策が成立することを理解できた。さらに、学校の実態や生徒の困り感について情報共有を行い、見立てを考えた上で、理解することが求められると考えられる。代表的な実践事例を参考にしつつ、学校の実態と結び付けた上で成り立つため、試行錯誤する中でPDCAサイクルを行い、教員間で共有できる環境が同時に求められる。

実際に、「物」中心の手立ては、下位層の生徒の支援策になることが明らかになり、今後は上位層の生徒にとってどのような支援策が有効であるのか考える必要がある。そこで、授業を構造化し、「思考」の足

場作りをしていくことが上位層を支援していくために重要であると考えられる（図2）。

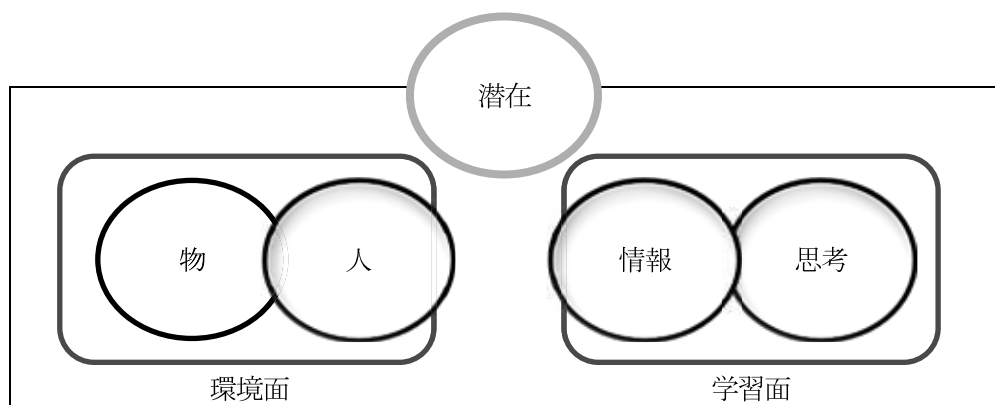


図2 UD環境のイメージ図

*UD環境のイメージ図の説明として、環境面は「UDチョーク」、「タイマー」といった物的支援を指す「物」と「個別支援」といった人的支援を指す「人」から成り立つ。学習面は「授業における理解」を指す「情報」と「考える力」を指す「思考」から成り立つ。その二つの面に加え、「学級の雰囲気」を指す「潜在」を含め、UD環境と考える。

現状、中学校のUD化の実現が遅れている中で、UDの有効性から中学校ですべての生徒を支援していくためには有効な手立てであると考えられる。だが、A中学校でも教員の重要度が高い反面、実行・実現度が低い背景にはUDにおける課題が克服できていないからではないかと推測する。特別支援教育やUDに対する理解に個人差がある限り、UDの視点を学級全体に取り入れたとしても、支援策として成り立つとは言い難い。だからこそ、個人差をなくすことはもちろん、中学校の実態、学級の中には困っている生徒がいるという共通認識の下、課題について向き合うことが第一歩であると考えられる。その上で、UDの手立てにより、このような有効性があるということを教員が実感したことで、実現に向けて近づくのではないかと推測する。

時代の変化に伴い、生徒の困り感は多様化し、困り感の深刻さも人それぞれである。そこで、学校全体で生徒に対する共通した理解に加え、どのような支援策を行っていくのかについて把握することは大切な視点である。また、UDを学校全体に取り入れていくことで、生徒の成長だけでなく、教員、学校全体の底上げにもつながる。相互に有効性があることに加え、教員全体が協力しながら、インクルーシブ教育システムを構築していくためにもUDという視点は今後も欠かせないものとなってくるはずである。UDの視点は目の前の生徒はもちろん、将来を作っていく。

主要参考文献

文部科学省（2012）. 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について（平成24年12月5日）

桂聖（2017）. 通常の学級で行う「授業のユニバーサルデザイン」とは LD, ADHD&ASD 2017年10月号 特集 ユニバーサルデザインと合理的配慮でつくる授業と支援 明治図書 pp.12-15.

静岡県総合教育センター専門支援課特別支援班（2017）. 中学校・高等学校に授業UDを広げるための校内体制モデルの提案 研究紀要（静岡県総合教育センター）第21号

<http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/kiyou1.pdf>